昭和19.7～

第24師団沖縄作戦記録

復員局調整

第24師団司令部史実史料

第32軍残務整理部

沖縄 402

防衛研究所図書館

２４Ｄ沖縄作戦記録

復　員　局　調　整

６３．１０
第一混成団複製

２４Ｄ沖縄作戦記録

目　次

第１章　２４Ｄ行動要旨
第２章　作戦前の状況
　第１　動員下令より沖縄本島上陸迄
　第２　沖縄本島上陸より原駐屯地出発島尻地区転移迄
　第３　島尻地区到着より敵来攻迄
第３章　作戦経過の概要
　第１　敵の沖縄本島来攻より５月４日軍の総攻撃中止迄
　第２　首里戦線撤退より島尻地区転進終了迄
　第３　島尻地区到着より戦闘終焉迄

第１章　２４Ｄ行動要旨

1　昭和１４年８月満州哈爾浜に於いて師団を編成同年１２月東安省に移駐爾来国境方面の防衛に任ず　（師団司令部は東安に位置す）師団の編合左の如し。

第２４師団司令部
第２４歩兵団
　歩兵第２２連隊
　歩兵第３２連隊
　歩兵第８９連隊
捜索第２４連隊
野砲兵第４２連隊
工兵第２４連隊
第２４師団通信隊
輜重兵第２４連隊

2　昭和１９年７月６日動員下令７月１３日動員完結。
　師団編制の中歩兵連隊の１大隊、砲兵１大隊、衛生隊並びに野戦病院を欠除す。

3　各部隊は自７月１３日至７月１９日間東安及び掏崗を出発し自７月１９日至７月２４日間下関及び門司に上陸し、下関及び門司に宿営す。
　第１、第４野戦病院は門司に於いて師団の編合に入る。

4　７月２４日沖縄本島に前進を命ぜられ８月１日門司、下関を出帆し８月５、６日沖縄本島に上陸し中頭郡に集結す。
（師団司令部は嘉手納に位置す。）

5　自８月上旬、至１２月上旬間中頭地区の警備に任じ且つ陣地構築ならびに教育訓練を実施す。

6　１０月１０日敵の初空襲を受く、中頭地区中央の１６０高地に戦闘司令所を移転す。

7　第９師団の転進に伴い師団は１２月１０日乃至１２日の間現駐地出発島尻地区に移駐しその防衛ならびに警備を継承す。

8　１２月中旬より３月末迄専ら築城を実施す。

9　２０年２月１１日歩兵連隊その他編制改正を実施す。

10　２０年３月２３日敵機動部隊の空襲を受く。
甲号戦備下令戦闘部署に就く。

11　４月１日敵は北飛行場正面より上陸を開始す。

12　４月１１日歩兵第２２連隊第６２師団長の指揮下に入り戦闘に参加す。

13　４月１４日師団は第６２師団の右翼に進出すべく命ぜられ、４月２０日戦闘司令所津嘉山に進出、各部隊は４月２０日至４月２９日の間逐次前進し首里前線に到着す。

14　４月２９日戦闘司令所を首里城軍司令部洞窟内に移す。

15　５月４日総攻撃に当たり敵を圧迫前進せるも、攻撃中止の軍命令に依り攻撃前の陣地に拠り持久態勢に転移す。

16　自５月４日、至５月中旬の間夜襲斬込等により敵に出血を与えつつ戦闘を継続す。

17　５月２７日頃右翼方面即ち小那覇、与那原方面に敵進出す。

18　軍命令に基ずき師団は５月２９日島尻南部丘陵地帯に拠り、更に持久戦を継続するため島尻地区に転進を開始す。

19　６月２日戦闘司令所新垣に前進、更に６日宇江城に前進す。第１線部隊は西海岸より国吉、大里、与座、八重瀬嶽の線に陣地を占領し陣地の強化に努力す。

20　６月１０日八重瀬嶺、与座嶺宇間地区より敵攻撃を開始せるも撃退す。

21　自６月１４日、至６月１７日間敵は１５７高地全面より進出して来り、捜索第２４連隊力戦防御す。

22　６月１７日、敵はわが全正面に接近し攻撃を加う。

23　６月２３日各部隊と師団司令部間通信連絡途絶し、統一的戦闘指揮不能となり部隊各個の戦闘に移る。

24　６月２４日中央地区防備の諸部隊(24S、42A. BO. Hei. 24T)敵の攻撃を受く。

25　６月３０日宇江城戦闘司令所陣地内に於いて師団長以下幕僚各部長等自刃す。

第２章　作戦前の状況

第１　動員下令より沖縄本島上陸まで

師団は満州東安付近の警備に任じありしが、昭和１９年７月６日動員を下令せられ、同月１３日完結内地に転用の為同月１５日より逐次東安付近出発、同月２４日前後下関及び門司に集結す。本輜送中師団は南西諸島に到り台湾軍司令官の隷下に入るべき命令を受領し、８月１日内地出発８月５日及び６日に亘り那覇及び渡具知付近に上陸を完了し第３２軍司令官の隷下に入る。

第２　沖縄本島上陸より島尻地区転移まで

１　師団は中頭地区を警備すべき第３２軍命令に基ずき概ね要図第１の如く各部隊を配備し同地区の警備に任じつつ築城及び教育訓練等に専念し作戦準備の完整を期す。

２　陣地は凡て洞窟式とし、野戦陣地を併用し上下一致の努力により昭和１９年１１月頃陣地は概ね完成の域に達し何時敵の来攻を見るとも之に対応し得るの状況にありたり。

３　陣地構築の進捗に従い軍、師団、各部隊に於いて行う教育訓練は一通り実施せり。

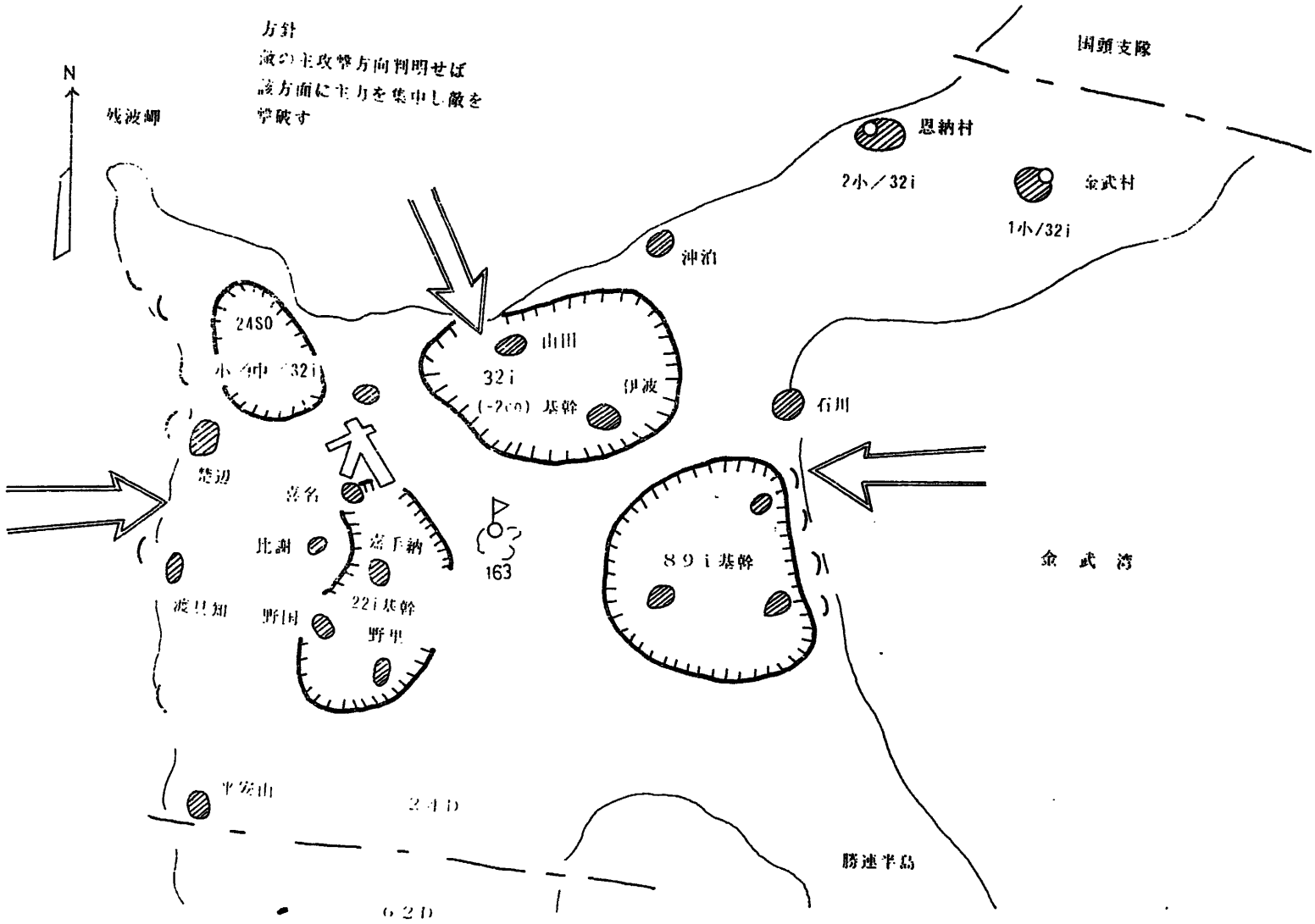
４　爾後更に作戦準備の完整に向い邁進せんとしありたる際、突如第９師団の抽出転進に伴い師団は島尻地区に転移を命ぜられ各部隊は１２月９日及び１０日夫々現在地を出発し１０日及び１１日島尻地区に到着し新任務につけり。

５　此時期に於ける歩兵連隊の編制の概要下記の如し。
連隊本部
歩兵２大隊 ─┬ １大隊は歩兵４中隊、ＭＧ１中隊BiA 小隊より成る。

要図第1

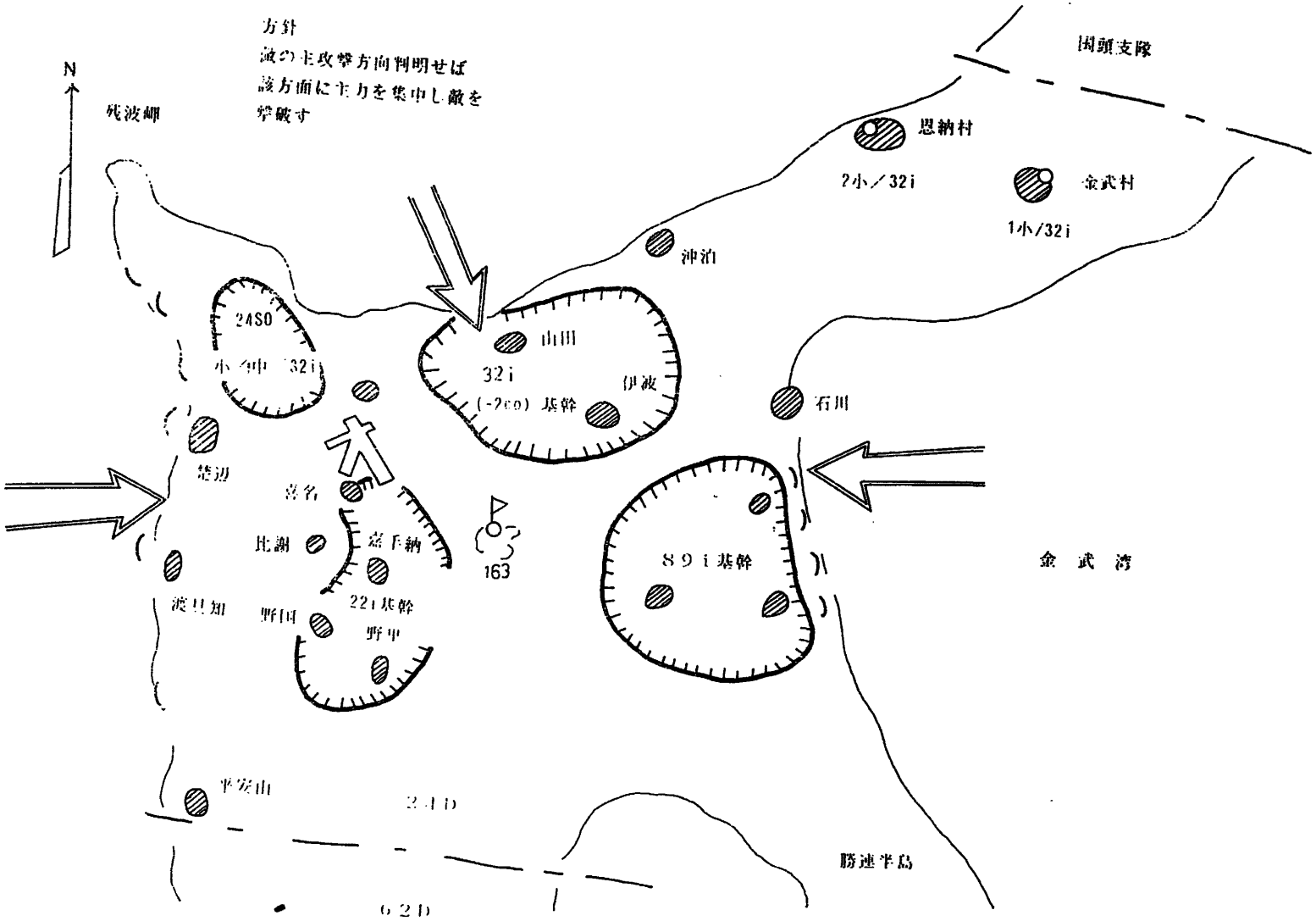
第２４師団中頭地区配備要図

（自昭和19年 8月初旬至島尻地区転移時）



要図第1

第24師団中頭地区配備要図
（自昭和19年 8月初旬至島尻地区転移時）



└歩兵1中隊は小銃約170 Lg9 重擲12を有す。
┌MG中隊はMg10 BiA1 小隊はBiA2を有す。
歩兵砲大隊 ─┤ 大隊はRiA1中隊、TA 1中隊より成り
└RiA 中隊はRiA4を、TA中隊はTA 4を有す。
通信中隊　（兵力約１５０名）

6　住民は食糧供出に、陣地構築作業に或は又各種作業に能く軍事を理解し協力を惜しまざりき。

第３　島尻地区到着より敵来攻まで

1　師団は島尻地区転移後既ね第９師団警備地区を継承し要図の如く各部隊を配備し警備を担任すると共に作戦準備に邁進す。

2　第９師団の実施せる築城進度は師団継承時未だ約30％なり，而して北部地区はいわゆる〃どたん岩〃地帯にして、作業比較的容易なるに反し南部地区は硬岩地帯にして多量の爆薬を使用するに非ざれば作業極めて困難な地帯なりしも、爆薬僅少にして作業は遅々として進捗せず、築城未完にして敵を迎うるの止むなきに至れり。

3　転進後敵来攻迄の期間僅少なりしと築城の進度前項の如く遅滞しありたりし関係上教育訓練は之を徹底的に実施する事を得ず、単に団体長の図上研究を１回実施し得たるに過ぎず、その他は各部隊毎に築城即訓練の趣旨に基き又は部分教育を実施し得たる程度にして、教育訓練を完了せずして敵を迎えたる状況なり。

4　２月１１日各部隊の編制改正を実施せられたり。此の結果歩兵連隊の編制は下記の如くなり。

┌連隊本部
│歩兵３大隊 ┌ 歩兵１大隊は歩兵３中隊、 MG1中隊
│　　│ BiA1小隊より成る。
│　　│ 歩兵１中隊は小銃約170 Lg9 重擲10を有す。
│　　│ MG中隊はMg10を有す。

└ BiA 小隊はBiA2但し第 3大隊は迫撃3 を有す.
連隊砲中隊（連隊砲４）
速射砲中隊（速射砲４）
└通信中隊　（兵力約 170）

5　昭和２０年１月１日以降敵偵察機は殆ど連日飛来し又、大小規模の空襲を際々受けたるも警備状況は殆ど完全にして損害も亦極めて僅少なり。

6　住民は食糧供出に対戦車障害物構築に或は又各種労務等積極的に能く軍事を理解し協力せり。

第３章　作戦経過の概要

第１　沖縄本島上陸より５月４日軍の総攻撃中止まで

1　昭和２０年３月２３日突如南上空に敵機大編隊現出0700頃より沖縄全島に対し爆撃を開始す. 師団は即時乙戦備を下令戦闘配備に就く。

2　３月２４日朝来多数の敵艦船近迫し艦砲射撃を開始したるを以って愈々待望の敵来攻なりと判断せられ、軍の甲戦備発令に応じ要図第２の配備を完了し愈々戦備を厳にす。

敵の銃爆撃及び艦砲射撃は逐日熾烈の度を加え、その目標は最初飛行場及び村落なりしも逐次陣地破壊にも指向せられ、特に小禄飛行場、与座、糸満、湊川、東風平地区に於いて熾烈なり。

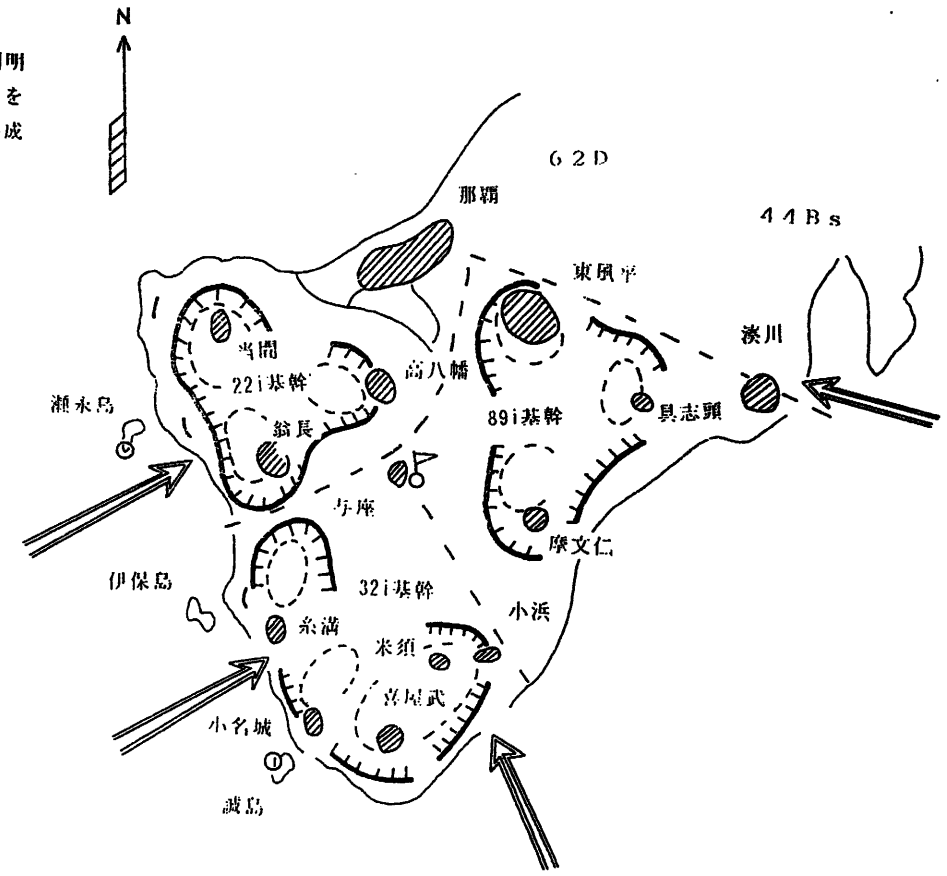
3　敵情判断の結果敵は島尻地区小禄及び糸満正面には上陸する事なきも一部を以て湊川、米須海岸に上陸するやも測られざる予想の下に、歩兵第８９連隊より湊川付近に、歩兵第３２連隊より米須付近に夫々一部兵力を増加し防備の強化に努む。軍に於いても３月２８、９日頃一部砲兵を湊川正面に転用し敵の上陸に備えしむる所あり。

4　敵は３月２７日、２８日の両日に亘り０７００頃より一部の艦船及び舟艇を以て湊川、米須海岸に対し上陸の徴を示したるも結局北谷方面よりする真上陸の陽動に過ぎざりき

要図第２

第24師団島尻地区防御配備要図
（自島尻地区転移至敵来攻初期）

方針
敵の主攻撃方面判明せば該方面に兵力を集中して重点を形成し敵を撃滅す



5　4月1日0900敵は大形舟艇約150隻、小形舟艇約60隻を以て嘉手納、北谷海岸に上陸す。其の兵力約2ケ師団にして1400頃は既に北谷～佐久川～中飛行場～英富士～屋良～伊良場～座喜味の線に進出す。

6　軍命令に基き4月11日夜歩兵第22連隊を小禄地区より抽出し首里周辺地区に集結し第62師団長の指揮下に入らしむ。

7　爾後4月22日に至る間敵の島尻地区再上陸を顧慮し各部隊をして益々陣地の強化に努めしむると共に特に北正面に対し新たに高良、当銘、志太伯、波平、武富、保栄次付近に陣地構築す。

8　第62師団正面の戦況意の如くならざる状況に鑑み、師団は軍の企図に基き逐次同師団右翼正面に移動の準備を整うると共に、4月20日戦闘司令所を津嘉山に推進し爾後の戦闘を準備す。

9　4月17日歩兵第22連隊は第62師団長の指揮を脱し原所属に復帰せしむべき軍命令を受領すると共に右第1線兵団として第62師団と逐次交代し、仲間付近より東方地区を確保すべき命令を受領したるを以て歩兵第22連隊を以て和宇慶～上原～棚原の線（後状況の急迫並びに連隊長の意見具申により我謝～小波津～翁長～幸地の線に改む）を確保して師団主力の進出を掩護せしめ、主力を概ね下記の如く逐次第1線に進出せしむ

師団戦闘司令所	4.29	首里
歩兵第89連隊第3大隊	4.15	運玉森（師団直轄）
歩兵第89連隊	4.28	新川、南風原付近
（第3大隊は4.20復帰す）		
歩兵第32連隊第1 大隊	4.23	小波津（師団直轄）
歩兵第22連隊(2.3BnTA欠)	4.17	翁長、幸地
歩兵第32連隊第2 大隊	4.26	前田北端賀屋支隊と交代
同連隊主力(2Bn含)	4.26	前田北端より東方三叉路付近まで確保

師団各部隊の4月28日頃62D右翼正面進出の行動概要及び同日頃に於ける師団全般態勢概ね要図第3の如し。

１０　島尻地区出発より、総攻撃直前迄に於ける主として各歩兵連隊の戦闘経過概ね左の如し。（要図第３参照）

（１）歩兵第２２連隊

イ　連隊は、４月１１日６２Ｄ長の指揮下に入り、同１７日原所属に復帰す。

当時連隊は、運玉森周辺地区に在りたるを以て、師団長は和宇慶～上原～棚原の線を確保し、師団主力の首里付近進出掩護を命ず。此の時連隊長は1Bn.RiA 及びその他の部隊を指揮して運玉森に来り、同時敵は既に和宇慶～ウシクンダ原～150 高地付近に逐次進出し、６２Ｄは寡兵克く之と激戦中なり、此の頃2Bn.3Bn の状況不明なりしを以て将校斥候を派遣し捜索の結果2Bn は我如古東方高地線に進出せるも孤立無援に陥り、衆敵の攻撃を受け損害続出し兵力の大半を失いたる状態なり、3Bn の状況は不明なり。

ロ　前項命令に基く和宇慶～上原～棚原の線は基の後の状況及び連隊長の意見具申により依り、我謝～小波津～翁長～幸地の線に改められ、４月１３日連隊長は師団命令に基き1Bn に対し大規模の斬込を以て敵進出の妨害並びに擾乱を命じたるも、遂に成功するに至らず、第１中隊長鈴木中尉以下数十名を失う、戦果不明なり。

ハ　師団主力の首里付近進出に伴い連隊は中地区隊として翁長～幸地の線を確保し、敵を陣前に破砕すべき命を受け1Bn を以て同線を占領せしめ、４月２３日所命の如く配備を完了す

ニ　４月２５日頃より敵は逐次陣前に現出し来る。

同時連隊本部は運玉森より弁ケ嶽に移動す。

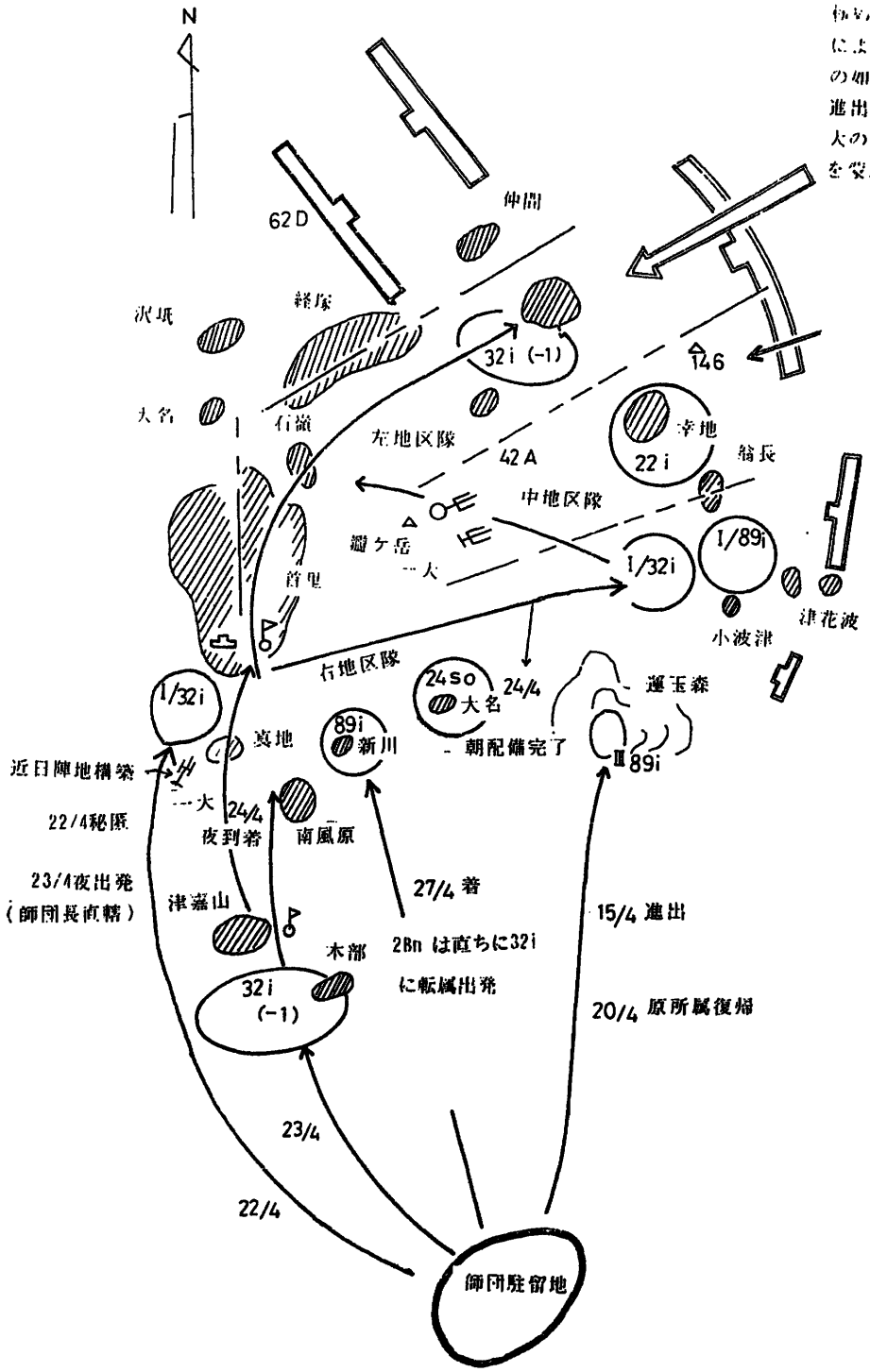
ホ　４月２２日頃、2Bn は連隊に復帰し左第１線となり首里秘密飛行場東側台地を占領す。

ヘ　右陣地に対して敵は、２７日頃より戦車を先頭とし攻撃し来り、1.2Bn は之と激戦力闘５月３日朝迄連日その陣地前に於いて150 ～200 の敵を殺傷するの戦果を挙げ、敵企図破砕に努力せるも我亦損害尠からず此間歩兵砲中隊長以下多数を失う。

要図第３

第２４師団行動経過後態勢要図

（註）敵の銃爆撃、艦砲射撃は昼夜間断なく実施せられ、加うるに降雨のため運動極めて困難なりしに拘らず将兵の努力により４月２８日頃、各部隊は本要図の如く逐次予定の線に進出せり。
進出と共に敵と激烈なる戦闘を交え多大の戦果を収めたるも我亦多大の損害を受れり。



（２）歩兵第８９連隊

イ　４月１５日６二Ｄの状況に鑑み、師団命令に基き3Bn を運玉森に進出同地を占領せしめ、４月２０日他部隊と交代復帰す。

ロ　連隊は、新作戦準備の為首里戦線に転進の命令を受け、４月２７日日没後行動開始下記の如く移動する。

連隊本部	新川
1Bn	津嘉山付近
2Bn	首里到着と同時に32i に配属
3Bn	南風原付近

ハ　師団命令に基き2Bn(TA 1小、RiA1小、MG 1中配属）を２８日出発、２９日首里到着32i 長の指揮に入らしむ。

ニ　連隊は前項の位置に於いて総攻撃の準備をなす。

（３）歩兵第３２連隊

イ　連隊は師団命令に基き、1Bを基幹とする部隊を４月２２日夜出発、４月２３日夜新川付近に於いて師団長の直轄たらしむ、同部隊は爾後師団長直轄として小波津付近を確保し、右1Bn/89i 左22i に連携し、連日力戦奮闘し多大の戦果を収め師団長より賞詞を受け、４月２８日1Bn/89i と交代２９日首里北側に於いて連隊に復帰せり、小波津付近の先頭に於いて失える兵力約半数なり。

ロ　連隊主力（1Bn 基幹欠）は師団命令に基き２３日日没後、原駐地出発同夜南風原、津嘉山、本部、長堂周辺地区に潜伏、次いで１大隊の兵力を以て速やかに前田北端を確保し６２Ｄ賀屋支隊を救出すべき師団命令を受領し、連隊長は2Bn を基幹とするものを以て２６日夜同地出発せしむ、2Bn は２７日夜前田部落を確保し同支隊を救出し任務を達せるも、同地進出のための戦闘に於いて多大の損害を受けその兵力の約半数を失えり、戦果大なりしも実数明瞭ならず。

ハ　連隊主力は、爾後首里東側地区に東面し陣地構築を命ぜられ、構築中なりしも之を中止し、連隊主力を以て2Bn を併せ指揮し前田東側台地を占領確保すべき師団命令に基き、２８日夕出発２９日夕同地に進出之を確保したるも進出迄に既に

約半数の損害を蒙れり。

ニ　４月２９日連隊正面の重要なるに鑑み2Bn/89i を連隊に配属せらる。

師団の右翼方面においては22i の戦闘地域たる120,146 高地付近に対し、敵逐次浸透し来りしを以て師団は連隊に対し之が奪回を命ず、連隊長は小波津付近より交代帰還せる1Bn を以て146 高地新たに配属せられたる2Bn/89i を以て120 高地の奪回攻撃を命じ、146 高地は５月１日夜之を奪回し得たり2Bn/89i の攻撃は５月１日、２日の再度に亘り実行せるも成功せずその後総攻撃を実施するの止む得ざるに至れり。

ホ　５月３日夜2Bn/89i を連隊長の指揮より脱し原所属に復帰せしめらる。

１１　４月３０日軍は全面の敵に対し総攻撃を実施し一挙に敵を撃滅するに決し、攻撃命令を下達する所あり、其の要旨下記の如し。

（１）攻撃開始の時期　　５月４日０４５０より３０分攻撃準備射撃を実施したる後攻撃を開始す

（２）進　出　線　　普天間東西の線

（３）６２Ｄとの作業地境　現在の通り

１２　師団は上記命令に基き５月１日早朝攻撃に関する命令を下達し、各部隊をして攻撃を準備せしむ。

１３　総攻撃における師団各部隊の状況概ね下記の如し。（要図第４参照）

（１）師団長は首里戦闘指令所に在りて作戦を指揮す。

（２）歩兵第８９連隊

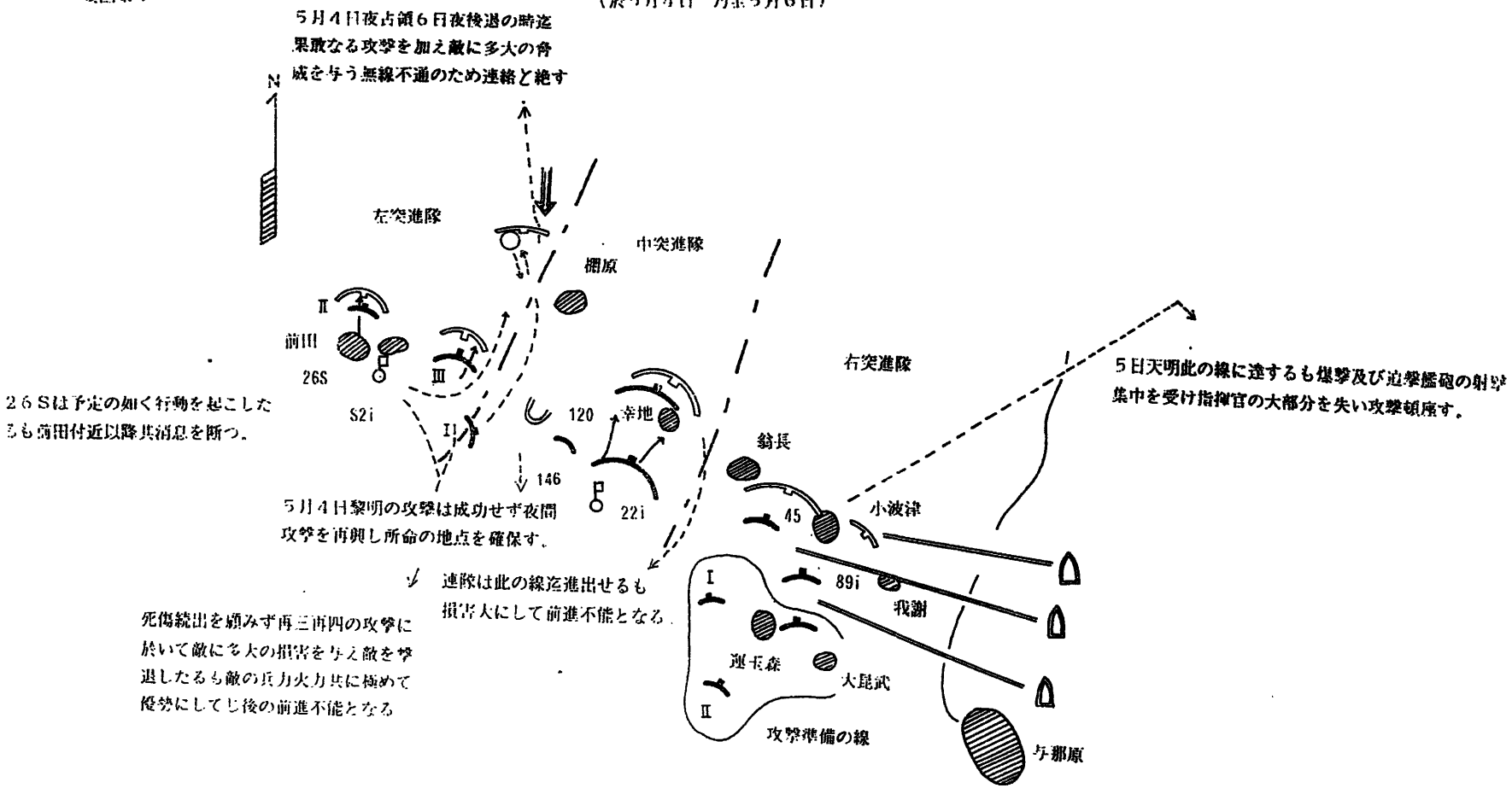
イ　連隊は右突進隊となり４日正午頃より行動を開始し1700を期し攻撃を開始す，2Bn は当時32' の指揮を脱し、首里方向より復帰途中なり、

当時敵の銃爆撃及び迫撃砲、臼砲射撃熾烈にして損害極めて大なり。

ロ　５日1Bn,2Bn は要図第４の位置に達するや時既に天明にし

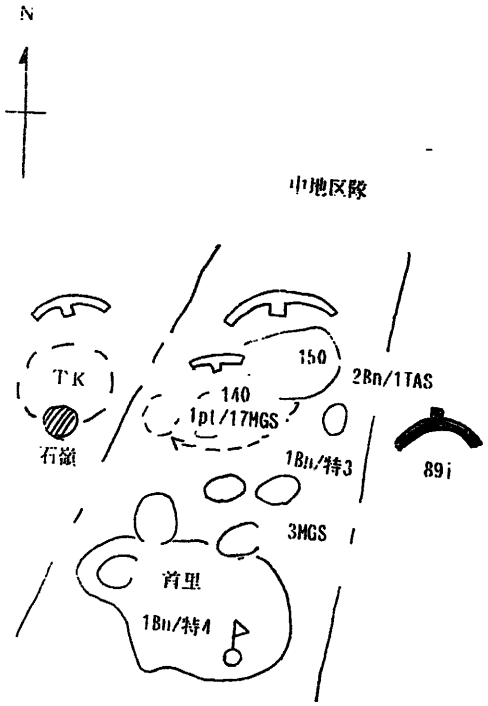
要図第4

第２４師団総攻撃戦闘状況要図
（於５月４日　乃至５月６日）



要図第5

歩兵第3[illegible]連隊陣地占領要図



て敵の統爆撃、迫撃砲及び榴砲射撃の集中を受け部隊は混沌たる状態となり指揮官の大部分は死傷せり、残存者は指揮官を失い或は負傷し稍々無統制の状況となる。依って連隊は一時攻撃を中止するの止むを得ざるに至れり。

ハ　3Bn は当時第三線部隊として運玉森付近にて攻撃準備中なり。

ニ　総攻撃の中止に伴い師団命令に基き一時安城？にに後退し、再編成を命ぜられ各部隊より、兵員の補充を受け、５月１０日1Bn,3Bn の編成を完了せり。

ホ　本戦闘に於ける損害概ね下記の如し。

(1)1Bn,3Bn は殆ど全滅、各中隊生存者１０名内外にして指揮官は殆ど皆無の状態なり。

(2)2Bn 中隊は中隊長以下幹部殆ど全滅

(3)第一大隊長丸地大尉、第三大隊長和田大尉　戦死

（３）歩兵第２２連隊

連隊は中突進隊となり右89i.左32i に連携して特にその一部を以て鈎長西側台地の敵を撃滅して右突進隊の攻撃を容易ならしむる如く命ぜられ、1Bn をしてこの任務に当らしむ。

連隊は４日０４５０よりの攻撃準備射撃及び突撃支援射撃に引接し攻撃前進し、幸地北端付近の線迄進出せしも遂に総攻撃中止となる第１１中隊は中隊長以下全員帰還せず。

（４）歩兵第３２連隊

イ　連隊は師団の左突進隊として下記の如く戦闘す。

1Bn は０５００行動開始第一線大隊として120 高地を経て棚原西北側高地に前進する如く命じたるも、天明と共に敵の猛射猛爆を受け第三中隊の如きは70% の損害を被るに至り、止むなく昼間の攻撃を一時断念し夜に入り連隊命令により攻撃を再興し、120 高地前田の中間地区を突破し予定の棚原西北台地を確保す、翌６日連隊命令を以て後退する迄約３日間能く頑強に之を確保し敵線内深く敵に与えたる脅威大なるものあり、軍司令官より感状を授与せらる。

26bs? は第二線大隊として142 高地進出を命じ予定の如く

前進したるも前田付近敵突破の後第三線攻撃部隊として第三線大隊に跟随すべきを命じ予定の如く行動を開始したるも敵の熾烈なる銃砲爆撃の為死傷続出し前進不可能となり、連隊長は４日夜更に部署を変更し攻撃前進を再興したるも前進し得ず、2Bn の如き全く敵の重囲に陥り脱出不可能となる。

１４　５月５日夕師団は軍命令により総攻撃を中止し戦略持久の態勢を更に強化するため首里北側地区に転進すべき軍命令を受領したるを以て、師団は概ね下記の如く行動す。

（要図第６参照）

（１）師団長は依然首里戦闘司令所に在り

（２）歩兵第８９連隊

イ　５月７日2Bn は配備を完了し、1Bn,3Bn 亦１０日再編成を終わり各部隊は総攻撃前の陣地を堅固に確保し戦闘を継続す

５月９日頃より敵は小波津正面より運玉森正面に向い攻撃を開始す。運玉森及び54高地付近は５月１０日頃より敵の猛攻をうけ第５中隊の１小隊は同１２日５４高地に於いて全滅す。

敵は逐次小波津西北方高地方向より主攻撃を指向し来る。当時第７中隊は安里西北方高地に於いて戦闘中なりしが、５月１５日頃その兵力殆ど皆無の状態となれり。

５月２５日運玉森は敵手に陥り瘦々之が奪回攻撃を実施せるも遂に成功するに至らず1Bn,3Bn 亦逐次圧迫を受くるに至れり。

５月２６日連隊は一部戦線の整理を命ぜられ約500 ～600m後方地帯の陣地を確保す。2Bn は依然現位置に在り。

与那原付近を突破せる敵は逐次兵力を増加し我後方に進出す。

連隊は多大の損害を生じたるを以て、他部隊より兵力の補充を受け５月２７日頃与那原突破の敵を攻撃したるも遂に成功せず。

（３）歩兵第２２連隊

イ　連隊は総攻撃中止後原陣地を確保し連日力闘す。

８９連隊方面に於いては小波津付近に敵の侵入する所となり、之が為連隊の右翼又敵に暴露し大なる脅威を受くるに至る。又左第一線2Bn 方面と1Bn との中間地区に敵滋出し来れるも、各隊既に兵力の激減を来し辛うじて敵を拒止す。

５月４日夜２８fsを連隊の正面に増強せられ一時陣地を強化し得たるも、該部隊亦数日にして壊滅的打撃を受け、連隊特に1Bn は敵中に突出孤立し現陣地の保持困難となりつつあり、此頃迄に各大隊は既に幹部以下その大部分を失い、兵力僅かに100 名内外となる。

連隊長は新たに解隊転属せしめられたる２８fs及び独立整備隊那覇分駐要員を1.2 大隊に配属し繰ケ嶽付近より150,140 高地の線に右より1Bn,3Bn,2Bn を配置し新たに陣地を占領せしめ、此間作井隊、独立機関銃隊等より人員兵器の補充を受けたるも各大隊の戦力大隊長以下数十名にして１００名に満たず兵器弾薬の補充又意の如くならず。

ロ　敵は新陣地に対し５月１３日頃より攻撃を開始し第一線各部隊は連日激闘せるも損害甚大にして連隊本部等の人員基の他負傷者に至る迄之を戦線に送り全力を喝して力闘せるも如何せん各大隊は其の人員僅かに十数名に過ぎざる状態となり、1Bn は５月２０日、2Bn は同１９日遂に敵の為重囲に陥り1Bn/24T,32i?の救援を得て辛うじて140,150 高地を保持しあるに過ぎず此の頃輓馬大隊新たに繰ケ嶽付近に陣地を占領し2Bn の全滅に伴い激戦中なりしを以て連隊長は新たに転属せしめられたる臼砲大隊長緒方少佐を長として3Bn を編成し（数十名）以てこの戦闘に参加せしめ輓馬大隊を併せ指揮せしむ。

此の頃1Bn,2Bn 長は封塞せられたる陣地より奇跡的に逐次脱出したるを以て2Bn を編成戦闘に参加せしめ、1Bn を予備とし首里、新川付近に於いて転属者等を以て大隊の再編成を為さしむ。

（４）歩兵第３２連隊

イ　５月７日、新たに８９fsを配属せらる。

同日連隊は勝山北端及び経塚北端を連ぬる線を占領し持久

すべき任務を受領す。当時1Bn は棚原より転進帰還し石嶺北側付近に集結す。総攻撃に伴う同大隊の損害は甚大にして大山大尉以下多くの将兵を失えり。

ロ　連隊は爾次の戦闘に依り戦力の減耗甚大にして新たに１～Ｓの１中、２６fs、２４Ｔ、２９rsの一部沖縄連隊区司令部将校１０、海上挺身第２６戦隊の一部を編入せしめられ各大隊を改編す。

ハ　敵は（イ）頃陣地線に対し逐次主力殊に戦車を以て勝山方向より攻撃すると共に経塚西方６２Ｄ正面より圧迫を加う第一線大隊は優勢なる敵に対して能く陣地を確保し連隊正面は５月１７日頃には著しく敵方に突出するに至る。

５月１７日連隊は中地区隊となり戦車隊の右翼（ＴＫは石嶺付近を占領しあり）に連携し、石嶺東北側～130 高地～140 ～150 高地に亘り陣地を占領すべき師団命令を受領し要図第５の如く陣地を占領す。

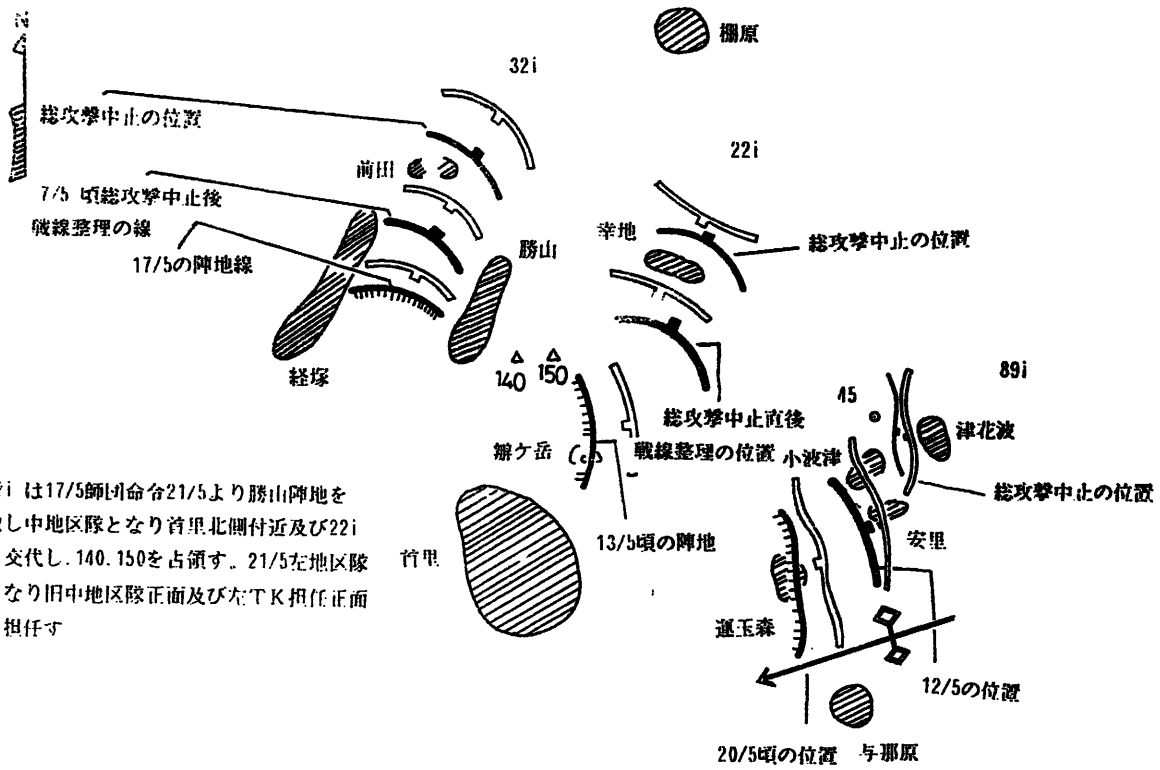
ホ　1Bは150,140 高地を占領しありしが連日の激闘により損害甚大にして５月２０日に至り毎日４０数名の死傷者を出したが補充のためには後方の兵力涸渇するの虞大なりしを以て師団長の認可を得て之を後退、ＴＡとの中間地区に陣地を占領戦闘せしむ。此の時1Bn の兵力は大隊長以下２０数名に過ぎず。

ヘ　５月２１日左地区隊となりＴＫの担任地区を併せ担任すべき師団命令に基き連隊長は従来の中地区隊の配備を基礎としＴＫの陣地を左第一線とし1Co/特4 の鈴木大隊長をして之を指揮せしむ。

１５　攻撃中止後５月下旬師団島尻地区転進迄に於ける状況概ね要図第６の如し

要図第5

第２４師団態勢要図（自総攻撃中止時至島尻地区転進時）



32i は17/5師団命令21/5より勝山陣地を撤し中地区隊となり首里北側付近及び22iと交代し.140.150を占領す。21/5左地区隊となり旧中地区隊正面及び左TK担任正面を担任す

第２　首里戦線撤退より島尻地区転進終了まで

１　師団は軍命令に基き更に戦略持久を強化する目的を以て５月２８日島尻地区転進に関する師団命令を下達し概ね下記の如く部署す。

（１）師団司令部６月２日新垣に転進

（２）８９ｉは５月２９日現陣地撤退、３１日与座に集結

（３）２２ｉは５月２８日現陣地撤退、友寄付近饒波川の線を占領し第２収容部隊となり６月７日真壁付近集結。

（４）３２ｉは現陣地に概ね1/3 の兵力を５月３１日迄残置し、５月２９日出発、全力を以て南風原～国場間国場川の線を占領し６月２日夜同陣地撤退、同日大城森付近に集結。

２　師団各部隊は前項部署に基き概ね下記の如く行動す。

（１）師団司令部は５月２８日首里出発、津嘉山に１日潜伏の上５月２９日新垣に集結す。

（２）歩兵第８９連隊

５月２９日運玉森南北の線出発、５月３１日与座に集結す。

連隊本部、1Bn,2Bn は南風原～山川～東風平村経由東風平村に一日潜伏の上３１日与座に集結す。

3Bn は連隊の収容部隊として首里南方吉原、８２高地を占領し収容したる後与座に集結す。

（３）歩兵第２２連隊

５月２８日現陣地出発第二収容部隊となり同夜友寄付近饒波川の線を占領す。

５月３１日頃より敵は逐次追尾し来り、各大隊共に軽戦したるも敵は逐次迂回滋出す。

連隊は一部を残置して真壁に転進し、師団予備となるべき命を受け６月１日夜1Bn を志太伯に残置し７日真壁着予備隊となる。

1Bn は志太伯に於いて優勢なる敵の攻撃を受け善戦能く敵の

鋭鋒を挫きたるも遂に６月７日夕敵の重囲に陥り漸く之を脱出して８日夕真壁に転進す。

４　歩兵第３２連隊

連隊は約1/3 の兵力を陣地に残置し５月２９日夕撤退す。此の時敵は既に松川方面より侵入し旧城趾を占領せるも能く之を突破し予定の如く同日夕1Bn を以て国場川の線、本部付近１／特４を以て「南風原駅」付近、3Bn を以て「一日橋」付近を占領す。

連隊本部は津嘉山に位置す。

右翼嘉屋武、神里付近には６２Ｄ、左翼豊見城付近には海軍部隊あり、敵は５月３０日頃より主力（戦車を伴う）を以て1Bn 方面に一部を以て1/特4 3Bn 方面に逐次進出し来り。第一線部隊能く之を拒止し苦闘多大の戦果を収め予定の如く大森城、賀数付近に集結を完了す。

第３　島尻地区到着より戦闘終焉まで

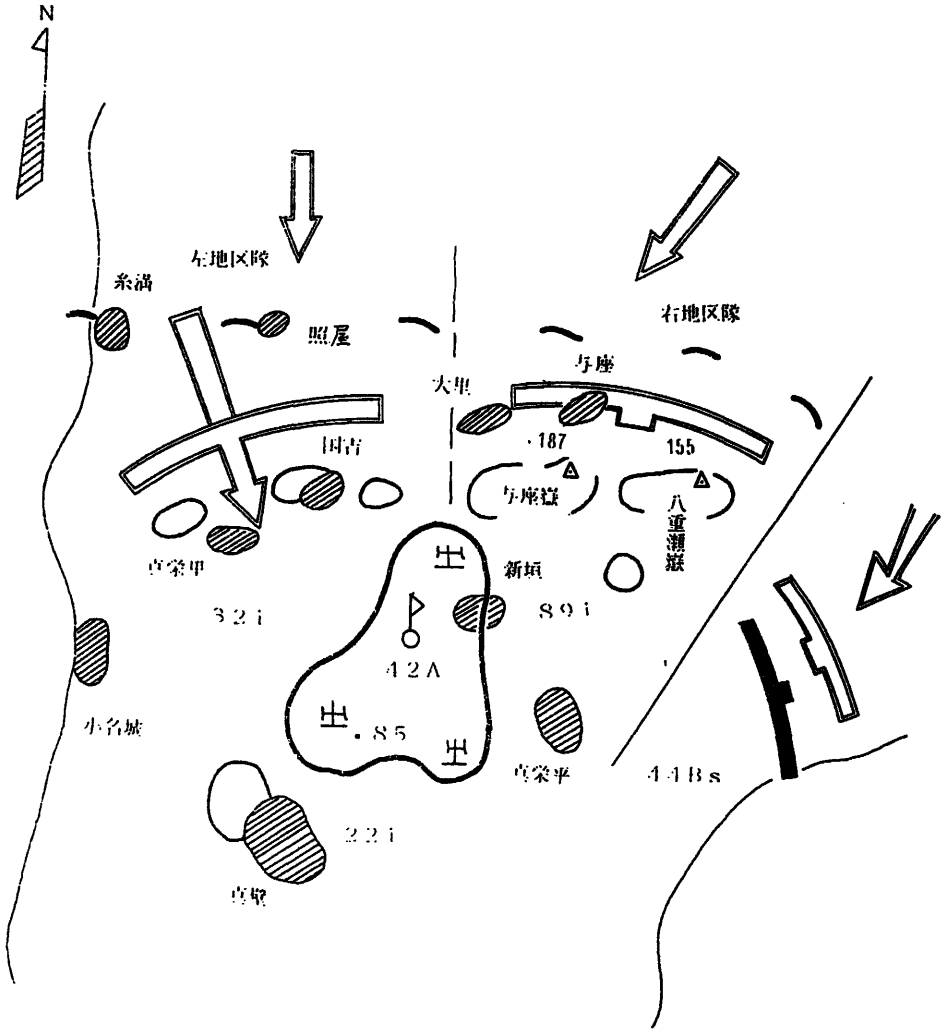
１　６月３日師団は軍命令に基き再び歩兵連隊を基幹とし之にＭＧＳ、ＴＡＳ特設連隊等を編入し再編成を行う。爾後痩次に亘り経理、衛生、獣医等将校以下兵員の補充により減耗せる兵力は概ね充足し得たるも、所謂各兵種の寄合い世帯にして加えて兵器、弾薬極度に減少し各大隊は小銃70～80、擲弾器４～５、擲弾筒４～５、機関銃中隊はＭＧ３～５、遠射砲中隊はＴＡ１門、連隊砲中隊はRiA １～２門という弱勢にして将校以下素質及び装備極度に低下す。

２　師団は軍命令に基き６月１日与座付近陣地占領に関する命令を下達（概ね要図第７の如く陣地を占領せしむ。）

３　６月１１日師団に対し左の如く軍司令官より感状を授与せらる。

要図第7

第24師団与座付近陣地占領図（自6月4日至同13日頃）



感　　状

第２４師団
同配属部隊

右は陸軍中将雨宮巽統率の下、昭和２０年３月敵沖縄本島に侵寇するや速戦島尻南部要地の防衛を遂にして敵の蠢動を許さず、４月上旬中頭地区より敵３師団南下し第６２師団方面の戦況危急を告ぐるや転じて首里東北方の戦線に加入し、敵南下の鋭鋒を挫き特に５月上旬敵第６２軍団に対する攻撃に方りては軍の中核兵団として至難なる状況を克服し、昼夜２日に亘り猛攻を敢行して敵後方兵団出撃の初動を破砕し大いに威武を発揚す。

爾来与那原、首里の線に鉄桶の陣を布き善謀勇戦遺憾なく兵団の精強を発揮して克く長期に亘り敵の攻撃を撃摧し、之に甚大なる打撃を与えたり、顕功正に賞賛に価す。

此の間師団長の統率機宜を得、同師団の勇戦敢闘は全軍の亀鑑たり、仍て茲に感状を授与す。

将来愈々志気軒昂従前の迫力を以て大君の御為忠則尽命の大節に徴し忠節を全うすべし。

昭和２０年６月１０日

正４位
第３２軍司令官陸軍中将　勲１等　牛　島　　満
功２級

４　６月１２日頃迄に於ける各部隊の行動概ね次の如し

（１）師団戦闘指令所は６月５日真栄平南側宇江城洞窟に転移す。

（２）歩兵第８９連隊

イ　６月５日敵は東風平村北方友寄付近に進出し、同７日遂に東風平に進入す。

ロ　６月９日頃より敵は益々正面の兵力を増加し強圧を加えるに至れり、連隊各部隊は又連日連夜昼間防御夜間斬込の奮戦力闘に依り敵に至大の損害を与え戦果大なるものあり。

（３）歩兵第３２連隊

イ　６月４日内至９日迄は部隊再編成並びに陣地の強化に努む

ロ　６月１０日　3Bn/22i 新に配属せられ連隊長は之を予備とす。

ハ　敵主力は当初４４Ｂｓ正面に進出し連隊正面に対しては敵現出せざりし所時日の経過に従い逐次東風平、志多伯、方面より賀数、湖平、方面に迂回進出す又武富、波平付近にも進入す。

ニ　６月１０日　我主陣地前に敵戦車現出激烈なる戦闘開始せらる。

ホ　同１２日に至り戦車を伴う敵の攻撃は愈々熾烈となり、各正面とも激闘を交え戦果大なるものあり将兵の志気極めて旺盛なるも、前述の如く装備貧弱の為之に徹底的打撃を加える事を得ず、国吉方面は敵の重点正面にして其戦闘は悽惨を極めたり。

（４）歩兵第２２連隊（3Bn 欠）

依然真壁付近に於いて予備隊なり。

5　６月１３日以後敵の攻撃は各戦線に亘り熾烈を極め我損害又極めて大なり。

師団は１３日３２ｉの正面の重大性に鑑み3Bn/32i の占領する真栄里陣地を２２ｉに交代せしめ、３２ｉの正面を縮小戦力の強化を図る目的を以て夫々処置する所あり、同１３日より同２３日迄に於ける彼我の状況要図第８の如し。

6　６月１３日より戦闘終焉迄の各部隊の状況概ね次の如し。

（１）歩兵第８９連隊

６月１５日敵は遂に其の一部を以て八重瀬岳～与座岳の中間地点を突破せり、其の兵力戦車を伴う約２ケ中隊なり、連隊は概ね新垣付近に於いて１９日連隊長以下殆ど全員戦死せり。

（２）　歩兵第３２連隊

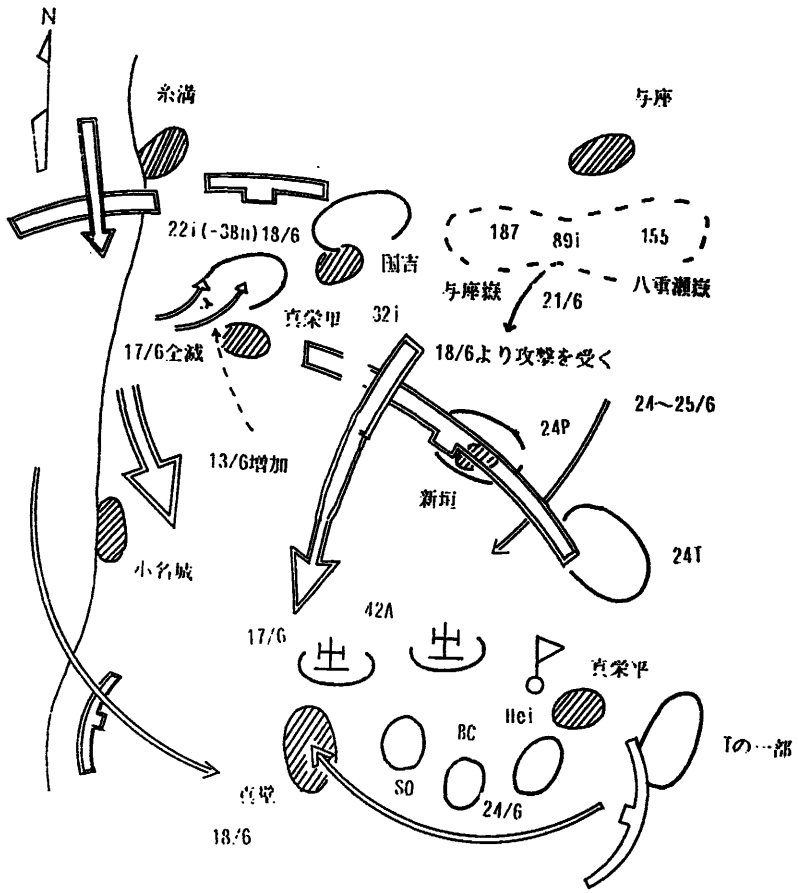
イ　６月１３日　師団命令により左第一線たる3Bn 陣地を22i に移譲し3Bn をして1Bn の右翼に連携し陣地を占領せしめ且つその他一部の配備を変更す。

ロ　じ後全線共に将兵の勇戦敢闘に依り能く現陣地を確保し志気極めて旺盛なり。

ハ　６月１７日午後敵は主力を以て左翼２２ｉ正面を突破し中街道方面より真栄里に進出すると共に７３高地の２２ｉ本部

要図第8

第 24 師 団 態 勢 要 図



を突破し３２ｉ本部陣地を包囲す。

二　６月１８日より各大隊共敵の重囲下最後の兵に至る迄連日能く撃闘を続け多大の戦果を収めたるも死傷極めて大なり、之後連隊本部陣地は戦車１５数両を有する優勢なる敵の攻撃を受け連日之を撃退し多大の戦果を収めたり、連隊正面は最後迄突破せられざりしも２２ｉの全滅に伴い左側背に猛攻を受くるに至り同２２日夕遂に敵の重囲を受け各第一線大隊との連絡を絶つに至れり。

（３）歩兵第２２連隊

６月１３日38n/32i と交代後逐次敵の攻撃は激烈の度を加え６月１７日に至り主力を連隊正面に指向す、連隊は極力之が撃退に努め多大の戦果を収めたるも我に兵器弾薬既になく僅かに各隊 2～3 の小銃あるに過ぎず殆ど全員戦死し、全面的に陣地を突破せられ連隊本部又重囲を受け連隊長以下殆ど全員戦死せり。

7　師団長は敵の攻撃急にして既に通信途絶せられ組織的統一指揮困難なる現状に鑑み、６月２０日下記要旨の訓示を為し部下を戒むる所あり。

訓　示　の　要　旨

今や通信機関破壊せられ統一指揮不可能となるに至れり、各部隊は現陣地付近に於いて最後の一兵に至る迄敵に出血を強要すべし、苟も敵の虜囚となり恥を受くる勿かれ最後の忠節を全うすべし、隣接部隊と合流するを妨げず。

8　６月２３日各部隊間と師団司令部との通信連絡途絶し戦闘指揮不可能となり部隊の各個戦闘となる。

9　６月３０日真栄平南側宇江城師団司令部洞窟に於いて師団長以下壮烈なる自刃を遂ぐ。

第２４師団主要職員下の如し

第２４師団　主要職員表

職名	階級	氏名	期別	備考
師団長	中将	雨宮巽	２６	20.6.30 戦死
参謀長	中佐	木谷義雄	３４	〃
参謀	少佐	苗代正治	４６	〃
参謀	少佐	杉森貫	４９	〃
兵器部長	少佐	小野芳雄	少１０	〃
経理部長	中佐	小沢辰二	３２	〃
軍医部長	少佐	都留完		〃
獣医部長	中佐	石垣誠一		〃
歩２２長	中佐	吉田勝	３２	20.6.22 戦死
歩３２長	大佐	北郷格郎	２７	生存
歩８９長	大佐	金山均	２６	20.6.21 戦死
捜索２４長	少佐	才田勇太郎	少１３	20.6.20 〃
野砲４２長	大佐	西沢勇雄	２８	20.6.21 〃
工２４長	大佐	児玉昶光	２７	20.6.22 〃
輜２４長	大佐	中村卯之助	２６	20.6.23 〃